

このたび、2011 ASCO (American Society of Clinical Oncology) に参加させていただきました。シカゴの町は建築の町といわれるだけあって、多くの高層ビルが密集しており、摩天楼という言葉がぴったりとくる場所でした。街のあちこちに ASCO の旗が掲げられており町全体で ASCO を歓迎する空気があり、コンベンションに対する力の入れようが感じ取れました。世界最大のコンベンションセンターである McCormick Place 貸し切って開催される ASCO には、アメリカが医療産業を盛り上げようとする意思を感じました。

会場では Gastrointestinal、特に Noncolorectal の分野を中心に見させていただきました。この分野では日本や韓国などアジアからの報告が多くみられました。全般的に今回の ASCO ではなにかおおきな BreakThrough があるというよりは、詳細な検討が積み重ねられたといった印象でした。そういった意味でも日本からの発表は JACCRO や SAMIT、ACTS-GC など我々にとってなじみの深い臨床試験が、その精度やきめ細かさで世界の中で注目されていることは日本人として大変誇らしく感じました。

他の分野を詳しく見ることはできませんでしたが、印象に残っているのは、乳癌の分野が会場の大きさ、演題数、症例の数、分子生物学的治療など先進性において、圧倒的であったことです。アメリカ人の乳癌に対する関心の強さを感じました。

各会場は、スクリーンが十数個ならび演者の姿は遥かかなたといった大変広大なものでした。それにもまして日本の学会との違いを印象付けられたのは、企業ブースの多さとその入場のためだけでも高額な入場料が必要ということでした。日本で言ったらさながらモーターショーのようでした。分子生物学的分野の薬や検査に関連した企業ブースの多さには驚かせられました。

今回初めての ASCO 参加でしたが、とても有意義でありました。毎年とは言わないまでも何年かに一度 ASCO に参加することにより世界の潮流を感じ取り、われわれが日々行っている治療の立ち位置を知りたいと感じました。

今回の機会を与えていただきましたこと心から感謝いたしております。